

「新しい出会い」(一年第一単元) — 教科書を使った自己紹介 —

新しい国語の教材化を考える会

本単元では、中学校での国語学習の土台を作りたい。自分の思いや考えを言葉として表すとともに友達の言葉をきちんと受け止める。そして、共に学ぶことの楽しさを実感することをねらいとしたい。

中学校に入学した生徒にとって、毎日が新しいことばかりである。学校、教室、先生、部活動、みな新しい。

しかし、友達だけは同じである。本校の校区は一小学校一中学校であるため、小学校からそのまま全員が中学校に入学してくる。友達は新しくないのである。人間関係も新しくない。このような状況であっても、なんとか新しい友達、新しい人間関係をつくっていききたい。子どもたちはそう思っているに違いない。

そこで、本単元の冒頭にある写真に題名をつけ、「伝え合つ」という活動を、新しい自分を紹介する活動にアレンジしてみた。

1 活動主義に陥らない

中学校は教科担任制である。授業開きなどでは、ほとんどの教科で自己紹介を行っているだろう。名前・趣味・その教科に対する思いを述べるくらいだろうか。

はじめの数教科はまでも、何度も何度も自己紹介をしていては、嫌になってくるだろう。まさに「伝え合つ」という活動に食傷気味になる。

そこで、国語科では話し方・聞き方を学習するのだということを教えたい。指導内容を忘れた活動主義に陥らないようにしたい。国語科が他教科とは違って受けもつべき指導内容を、教室の現実に即して具体的に決めた上で、授業に臨みたい。

また、その指導内容こそが評価の対象になるはずである。項目ごとに細かくABCをつけるコンテストのような評価は避けたい。

2 教科書の写真・挿絵を使って自己紹介しよう

授業のはじめに次のプリントを配布し、自己紹介のポイントを説明した。

スピーチで自己紹介

最初の授業は、新鮮な気持ちで自己紹介です。
スピーチを行います。……と言っても、カン・ン・タ・ン♥ 四十秒以上六十秒以内という長さです。ビデオにとりますから、準備も考えておいてください。いかに自分を印象的に紹介するか！ 楽しみにしています。なお、このビデオは卒業式前、最後の授業のときに、みんなで見える予定です。

スピーチの目的は、自分の名前を覚えてもらうことと自分のことを知ってもらうことにあります。

そして、そのスピーチのポイントは、次の三つです。

① 四十秒以上六十秒以内の時間を守る。
「全席で二〇〇字くらいが適当です。ひらがな・漢字も一字と数算します。話す内容を工夫する。」

② 教科書の中の写真・挿絵なんでも結構です。それと自分がかかわらせて、自己紹介をしてください。これが一番楽しいところ。

なお、書く相手は、友達ではなく、紙に挿絵です。あれもこれもと紹介するのではなく、「一つか二つに絞る」ことです。また、内容を簡潔に下げることが大切です。

③ 話す姿勢を注意する。
おどろき、とげるときはゆっくりと上げるようにしましょう。これで、聞き手の印象はかなり違います。
また、スピーチ中は下を向かないように。メモは持っても、それに頼りません。

ここでは、自己紹介のポイントを三つ示した。

一つ目は、時間を守ることである。ただ時間を提示しただけではわからないので、二〇〇字くらいが適当と字数を示し、原稿用紙を配布し、下書きをさせた。

二つ目は、話す内容の工夫である。ただ自己紹介と言えば、ありきたりのものになってしまう。国語科での「話すこと」は、他教科と違うということを意識させた。

また、相手意識のない自己紹介ではいけない。紹介する相手は、あくまでも教科担任の私であることを強調した。その意識があればこそ、新しい自分を出せるのではないかと考えた。

さらに、教科書の13ページから16ページの写真に限定せず、教科書の中の写真・挿絵なんでもけっこうです、としたのにも理由がある。それは、これから使う教科書をゆっくりと眺めてほしいからである。これから一年間使用する教科書をページーページ繰ってほしいのである。その時間を確保するための試みである。

そして、教科書中の写真に題名をつけるだけでなく、その写真・挿絵という対象を自分に引きつけてとらえさせたいと考えたのである。

三つ目は、話す姿勢である。自己紹介というスピーチは、原稿を読むものではない。メモはお守りである

という意識をもたせた。ビデオにとるといふのは、下を向かないための一つの手だてである。また、教師側にとつては、声とともに消えていってしまうスピーチをじっくり評価するための手だてでもある。

3 自己紹介の実際

子どもたちが選んできた写真・挿絵は実に多彩であった。驚きの連続と言つてもよかった。

いちばん多かったのが、16ページの猫の写真であった。「私の家にもこんな猫がいます。」からはじまり、「この猫は私です。これからの中学校生活を見つめているのです。」「ぼくも、この猫のように孤独です。友達を待っています。」などさまざまであった。

そのほかのスピーチを紹介する。

表紙裏の写真……「ぼくは二人兄弟です。右側がぼくです。左側が兄です。イルカは仲良く飛び上がっています。ぼくたちはケンカばかりします。だから、お母さんは鳥のように相手にしません。」

11ページの写真……「ぼくもこんなふうに飛べたらいいなと思います。ぼくは人間ですから、飛ぶことはできませんが、気持ちは大空を飛ぶように大きいです。」14ページの芽の写真……「これはわたしです。中学校

でどんな花を咲かせられるか期待でいっぱいです。」243ページの挿絵……「これはぼくとお父さんです。ぼくは右側で、お父さんに叱られています。ぼくはよく叱られます。でも、中学生になったので、叱られないようにしたいと思っています。」

こういつた自己紹介の連続で、時に笑いに包まれるユニークなものとなった。

自己紹介の後、印象に残った自己紹介について、意見を交換した。多かったのは、一度も下を見なかったものとか、写真と自分をうまくだぶらせているものなどが挙げられた。

4 評価の実際

自己紹介のポイントを評価した。つまり、指導内容である、時間・工夫・姿勢の三点を評価した。制限時間内か、工夫はされていたか、原稿に頼らなかつたかである。工夫については、あくまでも教師の主観である。細かく要素分析して、こと細かく評価などしない。めんどろなだけである。教師がすぐれたスピーチを多く聴き、聴く耳を鍛えておけば、自信をもつて評価できるはずである。単純なようであるが、指導内容を評価する、これに尽きるのではないかと考える。